

品目分類：野菜，技術分類：栽培技術

カボチャ新品種「ジェジェJ」の特性を活かすことで2月出荷が可能		情報分類	普及情報
〔要約〕短節間・高貯蔵性カボチャ「ジェジェJ」は、貯蔵中の果肉の軟化や果皮の退色が少なく、長期貯蔵に適する。本土地域の8月下旬播種で11月下旬に収穫し、10℃条件下で貯蔵した場合、2月に出荷ができる。また、密植栽培により40%程度の増収が可能である。			
園芸作物部野菜研究室・農産物加工研究指導セ流通保蔵研究室		連絡先	099-245-1125
普及対象地域等	本土の抑制カボチャ栽培地域	普及見込面積等	30ha

〔背景・ねらい〕

1～3月に販売されるカボチャは80%が外国産で占められており、消費者や市場からは安心安全な国内産カボチャの供給が求められている。また、2～3月は国内産がほとんどないため、高単価での販売が期待される。この時期に出荷するためには、11月下旬～12月上旬に収穫する抑制カボチャを2～3ヶ月貯蔵する必要がある。そこで、北海道農業研究センターで育成された短節間・高貯蔵性カボチャ「ジェジェJ」を利用し、高貯蔵性を活かした国内産端境期出荷体系の開発と短節間性を活かした密植多収技術を確立する。

〔成果の内容・特徴〕

- カボチャ新品種「ジェジェJ」の特性は本県主力品種の「えびす」と比較して以下のとおりである。
 - 貯蔵後の蒸した果肉の硬さは硬く、貯蔵開始から90日間にわたってホクホク感を維持できる（図1）。
 - Brixは貯蔵60日以降に高くなる（図1）。
 - 果皮の緑色は濃く、長期間の貯蔵を行っても黄化による色あせは少ない（図2）。また、外観は貯蔵開始から80日程度まで良好である（データ略）。
 - 腐敗は少なく、腐敗率は貯蔵開始から90日目まで10%程度である（図3）。
 - つる長は短く、密植栽培が可能で、畝幅3mとした場合、慣行の畝幅である4.5mと比較して1果重や果実品質を低下させることなく、40%程度の増収が可能である（図4）。
- 「ジェジェJ」を利用し、8月下旬播種で、11月下旬に収穫を行った場合、貯蔵により2月に出荷が可能である（表1）。

〔成果の活用面・留意点〕

- 温度10℃、湿度70%に設定した貯蔵庫で貯蔵した果実を用いた結果である。なお、定温貯蔵庫がない場合、貯蔵中に果実が10℃以下に長期間遭遇すると低温障害による腐敗果が発生するため、最低気温10℃を長期間下回らず、暗所で風通しの良い場所で貯蔵を行う。
- 生育初期は直立に生育し、風で折れやすいため、苗定植の際は誘引方向に斜めに定植する。
- ソルゴーなどで防風垣を設置する。
- 本品種および作型を新規に導入することにより10a当たり62万円の粗収益が見込まれる。

〔具体的なデータ〕

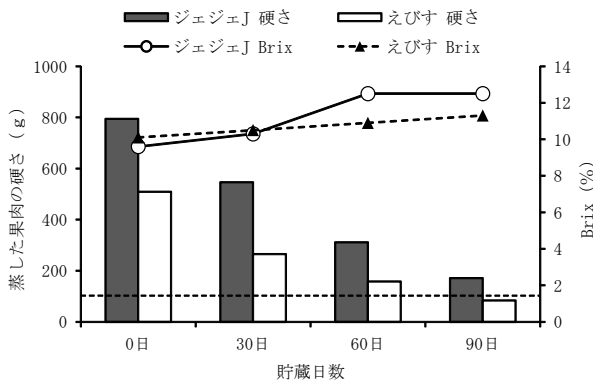


図1 貯蔵後の蒸した果肉の硬さとBrix

注) 1. 2ヶ年の平均値 (H23, 24)
2. 点線 (100g) はホクホク感の下限値を示す

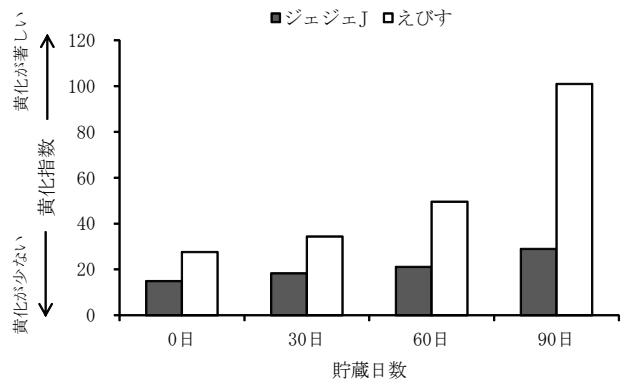


図2 貯蔵後の果皮の黄化指数 (H25)

注) 黄化指数=L値×b値/|a値| : 果皮の黄化を示す

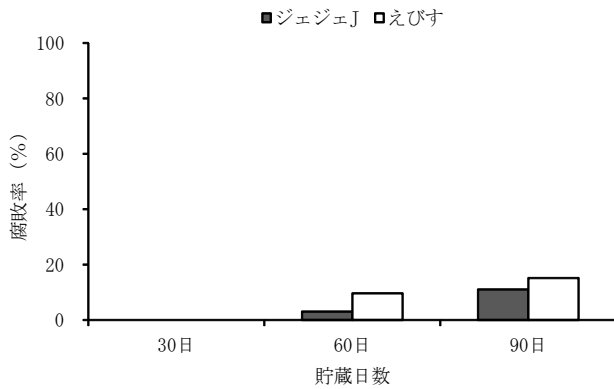


図3 貯蔵後の腐敗率

注) 2ヶ年の平均値 (H24, 25)

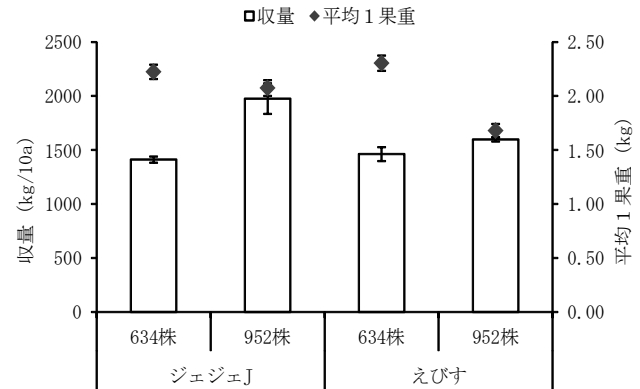


図4 栽植密度の違いと平均1果重, 収量 (H25)

注) 634株: 畝幅4.5m, 株間35cm
952株: 畝幅3m, 株間35cm

表1 「ジェジェJ」を利用した新出荷体系表, 収益試算

出荷体系	品種	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	栽植密度 (株/10a)	収量 (kg/10a)	貯蔵後収量 (kg/10a)	単価 (円)	粗収益 (万円/10a)	農業経営費 (万円/10a)	農業所得 (万円/10a)
新体系	ジェジェJ	播種	-----	収穫	貯蔵	出荷			952	1975	1778	350	62	34	28
従来体系	えびす等	播種	-----	収穫	出荷				634	1462	-	250	37	27	10

注) 1. ジェジェJの貯蔵後収量は収量から貯蔵中の腐敗収量を差し引いた収量。

2. 農業経営費は農業経営管理指導指標を使用し, 種苗費, 肥料費, 諸材料費, 労働費については, 栽植密度に応じて試算した。貯蔵コストは含まない。

〔その他〕

研究課題名: 短節間・粉質系カボチャを利用した鹿児島ブランドカボチャの大規模生産拡大技術の開発

予算区分: 公募型

研究期間: 平成26年度 (平成23~25年度)

発表論文等: 平成23~25年度 農業開発総合センター秋冬作野菜試験成績書